

非正統治療者モーリス・メッセゲの植物治療

— 南仏ガスコニュ地方植物民俗療法の現在 —

鈴木 七 美*

キーワード：モーリス・メッセゲ，植物民俗療法，水治療，ホメオパシー

The Phytotherapy of Maurice Mességué :

Development of Botanical Folk-Medicine in Gascogne

Nanami Suzuki

はじめに

1997年9月の初め、私はモーリス・メッセゲの植物治療を体験することにした。それは、ヨーロッパとくにフランス、スイス、イタリアで人気を博しているところ最近日本でも喧伝されるようになったものである。

私がそうした噂をはじめて知ったのは、もう3年前のテレビ番組(NHK教育)で「南仏・薬草治療のふるさと — モーリス・メッセゲの世界」という番組を見た時である。それ以来私は、間欠的にメッセゲに関する情報を収集してきた。そして、機会があれば、実際にメッセゲ療法の調査研究を行ってみたいと考えようになった。

そのように私がメッセゲの薬草治療に惹かれたのは、これまで私が19世紀前半アメリカのトムソニアニズム研究に携わってきた経緯の延長にある。トムソニアニズムについて詳しくは、拙著『出産の歴史人類学』(新曜社、1997年)を参照していただきたいのだが、一言で言えば、一農夫サミュエル・トムソンによって創始された一大植物治療運動である。それは、アメリカに自生する植物こそがアメリカに住む人々の病

気を癒すことができるという信念に裏づけられた、素人の癒しを勧めるものであり、当時台頭し始めたレギュラー・ドクターに対抗する非正統的療法としてきわめて高い人気を博した。モーリス・メッセゲは、そのサミュエル・トムソンその人を思い起こさせるに十分な人物だったのである。

トムソンはロベリアという植物を基幹植物として、その植物治療の処方体系を考えていた。そのロベリアへの着目は、もちろん彼自身は否定しているとはいえ、アメリカ・インディアンの知恵に学んでいるふしがある(鈴木 1994; Numbers ed. 1987)。とはいえ、植物治療そのものは、当然のことながらヨーロッパにも伝統的な系譜として敢然と存在するものである。

そこで私は、ネイティブ・アメリカンの治療世界に一方で注目しつつ、他方で、ヨーロッパの伝統的植物治療の系譜を解明するその糸口を探し始めたところだった。そこに、モーリス・メッセゲが現れたのだ。

しかも、メッセゲに着目することは、ヨーロッパの伝統的植物治療の系譜を浮き彫りにする糸口となるだけでなく、まさにその現在がどのよ

* 医療人類学 欧米フォーク・メディシン

うになっているのかをも提示してくれる。

幸いにも、京都文教大学よりメッセージ療法の調査を行うチャンスをいただいた。以下は、そのフィールド・ワークの成果の一端を、未だ熟さないままではあるが、とりあえずまとめた報告である。

I モーリス・メッセージという人

モーリス・メッセージは、1921年12月14日、フランスのガスコーニュ地方ガヴァレ村に生まれた。

賄い女として働く母は忙しく、一人の時間にモーリスは、メッセージ家に数百年前から伝わる植物治療の書物を頼りに、周囲に自生するハーブの身体への効果を自分で試し、植物治療のおもしろさにめざめていった。

といっても、モーリスが彼の植物治療を会得するのに大きな役割を果たしたのは、彼の父カミーユである。それは、モーリスが彼の『自伝』を次のように書き始めていることに端的に表れている。

私たちの郷里では、「水源を知らなくては、その川を知っていることにはならない」といわれています。私にとっての水源は、私の父です。(Mességué 1970:7)

父カミーユについて、モーリスは、獵師であったことを述べたうえで、こう書いている。

また父は、水脈占い者 (sourcier)¹⁾ でもあり、最後に民間療法師 (guérisseur) でもありました。民間療法師という肩書を最後にしたのは、私の家ではそんなことは驚くようなことではなかったからです。私たち一家は、どんなものでもすべて家で治していました。祖父たち、祖母たち、そして母も、ドロームのヴァランス裁判所から咎められたことはあ

りましたが。(Mességué 1970:13)

「自分たちで病気をなおす」、これが植物民俗治療の原点である。それはあまりにもあたりまえの風景だった。

農民たちは、レギュラー・ドクターや都会の「薬剤師」に対して不安や恐怖心をもっていた。

人々は、薬剤師 (pharmacien) というものがあることを知らないわけではありませんでした。町の薬屋では、できあいの薬で病気の治療をしているということも、人々は聞いていました。でもそれは、人びとにとっては何か神秘的な、不安を感じるものだったのです。

第一、そんなところに出むくほど、お金もありませんでした。そして、人々はそうしたことに怖れを抱いていました。医師のもとに行くというだけで、人を死に導くかもしれない通路に立つことのように感じましたが、薬剤師のところに足を運ぶなどということは、もう死の待合室に行くようなものでした。薬を購入するということは、ひどい重病に陥っていることを意味していたのです。(Mességué 1970:18)

むしろ、人々は医者よりもカミーユのところで癒されたいと思っていた、とモーリスは言う。それは、「人々が植物の力を信じていたから」である (Mességué 1970:17)

人は古くから植物に信頼を寄せてきました。何でも大地から採ることを習慣としている者には、病気を治すものも大地がもたらしてくれるはずです。家で人々は、「処方秘訣 (bonnes recettes)」を繰り返し読んでいました。また人々は、賢い女 (bonne femme = 産婆) よりも詳しく知っている者もいておかしくないと思っていました。そうした人々にとって、私の父は「植物の大家 (maitre des plantes)」でした。(Mességué 1970:17)

-18)

大地に恩恵を受ける者は、大地に根づく植物によってまた癒されるのだ。そして彼らがカミーユのもとを訪れるのは、「自分だけのための処方方で治療にあたってくれる術知 (science) を期待していたから」でもある (Mességué 1970:17)

そんな父カミーユに、モーリスは子どもの頃から植物の知識を伝授された。

やがて私は、父について歩くようになり、父にいろいろな草や植物をみせてもらいました。(Mességué 1970:14)

「刺す草 (l'herbe qui pique)」(イラクサ l'ortie)は、これを摘むやりかたを知っていると刺されず、煮ると胃にも腹にもやさしくなる。「ツバメ草 (l'herbe aux hirondelles)」(クサノオウ chelidoine)は、「死にかけている病人を泣かせ、治りかけている病人を歌わせる」もので「いちばんよい」植物だという。そして「大工の草 (l'herbe aux charpentiers)」(セイヨウノコギリソウ millefeuille)は切り傷をなおしてくれる。カミーユが用いた植物は約40種にものぼった。(Mességué 1970:14-15)

植物の力と採集する時期の関係についてもモーリスはカミーユから教えられた。

満月の光は植物の力をみんな奪ってしまう。植物の効力が十分強くなるには、それが陽光によく照らされ、月光にはほとんどあたらないことだ。また薬用サルビアを採るのに最もよいときは、聖ヨハネの祝日の明け方なのだ。

(Mességué 1970:15)

カミーユが「三日月がとても細いな」といった翌朝は、メッセゲ親子は植物を採りにいったものである (Mességué 1970:15)。

カミーユの植物に関する知識は、先祖伝来の『植物のバイブル』に由来している。

祖父は、家に代々伝わる『植物のバイブル

(Bible des Plantes)』を父にも与えていました。バイブルとはいっても、本ではなくノートですらありませんでした。それはほとんど文字を書くことのできなかった遠い祖先の一人が、薬効のあるさまざまな植物の絵を描き記した数葉の紙でした。困ったときに父は、それを食器棚の引き出しから取り出し、調べていました。(Mességué 1970:17)

モーリスによれば、四百数十年の歴史をもつというメッセゲ家に伝わる生活知、それが『植物のバイブル』であり、そのうえにメッセゲ療法が確立されていったのである。

とはいえ、注目すべきことは、そのメッセゲ家の療法、つまりカミーユの療法が、たんに植物をもちいたものにとどまらないということである。そこには、水治療がないまぜになって適用されていた。モーリスは言う。

父は、足浴法 (bains de pieds) で病気を治していました。父が彼のマセラシオンと呼んでいた植物の浸出液を3〜4リットルのお湯に加え、そこに病人は足をしばらく浸しておくのです。父はこのやりかたを祖父から教わったのですが、その祖父もその父親からそれを伝授されたということで、つまり先祖からずっと伝えられてきた療法でした。(Mességué 1970:17)

すなわち、植物の適用がここでは「足浴法」という水治療の一手段を伴ってなされていたのである。

水治療は、通常、オーストリアのプリースニッツという一農夫が18世紀末に開発したとされている (Cayleff 1989)。その影響はアメリカにも及び、それが水治療運動として隆盛を極めたことは、すでに拙著で明らかにしたとおりである (鈴木 1997)。

しかし、水治療法それ自体はヨーロッパのな

かに民俗療法として長い歴史をもっていたのである。しかも、水治療と植物治療は、ないまぜになって民俗療法を構成していたのだ。後述するように、この植物治療と水治療の合体という事態は、現在のメッセゲ治療センターにおいてなお（あるいは、ますます）顕著である。

ともあれ、こうして会得したメッセゲの植物治療なのだが、その評判を聞き遠くからも訪れる人々も徐々に増えていった。が他方で、彼が治療者としての資格をもっていなかったため、裁判にかけられるという苦難を味わうことになる（Mességué 1970:111-121）。

現在、メッセゲは、資格をもつホメオパシーの医者とレギュラー・ドクターを常駐させているクラン・モンタナの植物治療センター、従弟のジャック・デカン氏が運営するオヴロナッツの温泉治療所、そして息子のディディエが責任者であるイタリア、ヴァレーゼの治療センターの三カ所で植物をもちいる治療と療養を行うようにし、自らは生まれ故郷にほど近いフルーランスの村や自宅のある南仏ムージャンで無料で植物治療を続けている。

ちなみに、同毒療法といわれるホメオパシーとメッセゲの植物療法が重合しているのは、興味深い事態である。ホメオパシーは、瀉血や下剤を用いる医療に疑問を抱いた18世紀末ドイツの医者ザムエル・ハーネマンが、「健康な人に病をひきおこすものは、その病気に罹っている人を治す薬となる」、「希釈すればするほど、薬の効果は高まる」という二つの教条を掲げて始めた非正統医療の一つである。19世紀にはヨーロッパのみならずアメリカにも広まり中流の知識階層を中心に人気を博し、スイス、フランス、ドイツでは現在も人々の生活に浸透している²⁾。

1997年8月末から9月にかけて私が訪ねたスイス北東部アッペンツェル地方トイフェンの

「ドクター・フォーゲルの診療所」も、この地域の人々にとってなくてはならない場所である。フォーゲルは、彼のホメオパシーの基幹植物ヤグルマギク（sunflower）の栽培に適した地を長年探し続け、日照、温度、湿度、土壌などが理想的なこの地に診療所と薬草植物園を設け、自らもドイツから移り住んだ。現在は、滋養強壮作用があり風邪にも効く「エチナフォース」などフォーゲルのホメオパシーの植物薬を調整する研究製剤所が、緑豊かな草原にリンゴの花が白く輝くコンスタンツ湖畔のログヴィルに設けられ、濃いピンクの花弁を太陽に向けたヤグルマギクが咲きほこっている³⁾。ここから向いの山に二両編成の赤い電車で登っていくと、アッペンツェル州が開ける。そこには、この地域特有の滋養強壮剤である牛乳から製した「モルケ」や薬草入りの強壮酒「ビター」がある⁴⁾。もちろんフォーゲルもそれらをとりいれており、この地域の養生法は互いに影響しあい結びついている。

II メッセゲの植物治療所 — クラン・モンタナ

私が調査を実施したのは、メッセゲの三つの治療所のうちの一つ、クラン・モンタナの治療所である。

クラン・モンタナのキュア・センターは、ローヌ川沿いのシエールから40分ほどバスで葡萄畑のあいだの曲がりくねった小道を登った山小屋風のアンバサダー・ホテルの一角にある。

白い看護服を着て爽やかな笑顔で部屋まで迎えに来てくれたローレンスに連れられてキュア・センターに一步足を踏み入れた私は、強いハーブの香りに一瞬頭がくらくらしそうになった。ティザーヌ（tisane）と呼ばれるハーブ・ティー

のポットには、いつも「患者」たちが一日のその時間に飲むのにふさわしいハーブが煎じられ一杯に入っている。ピンクのガウンに身を包んだ女性たちがソファに腰掛けて治療の順番を待ちつつティザーヌをすすっている。床におかれたヴェーパライザーからは、ユーカリプスの香りの蒸気が送り出されている。清浄効果があるそうだ。私の周りに、いつもとまったく違う世界が広がった感じがした。

メッセージ・キュアセンターのスケジュール

ホメオパシー・ドクターの問診 キュア・センターのスケジュールは、一人一人の状態、体質を考慮しておこなわれる。滞在期間にかかわらず、センターに到着して最初に行われるのがホメオパシーのドクター、クリスチャン・ロイの診察である。

血圧・体重のみを測ると、ドクター・ロイの問診が始まる。日常の生活の様子、身体に関する悩みなどについて話をする。私は、旅でしか訪れたことのない京都という町に来て仕事を始めてちょうど半年になること、毎週一度新幹線という超特急で往復することもあって時に身体に魂が追いつけないことがあること、大学では薬学を専攻し、その後医薬品の合成研究所に勤め、いまは民間のものも含め植物や水をもちいる治療に興味を抱いていることなどを話した。

その結果ロイは、まず、「アクティブラス」と名付けられたチンキを30滴水に落としたものを、一日三回食前に飲むように指示した。このチンキは、植物食餌療法(Phyto-diététique)の一つとして開発されたもので、白樺(Bouleau)の水溶性アルコール浸出液(70%)に蜂蜜、野菜・果物の絞り汁、亜鉛とカリウムを加えたものである。利尿作用によって高血圧を予防・治

療し、緩下作用によって痩せることを促し、痕跡元素(生体中に微量に見いだされる元素)の吸収も可能にするという働きがあるという。もう一種類は、「オメガリン」という黄色い液の入った透明カプセルで、これを昼食と一緒にとるように言われた。オメガリンはポリジという植物を含み、細胞膜に付着した不飽和脂肪酸を取り除き若さを保たせる働きがあるらしい。なにを服用しても副作用を感じてしまうので、ふつう薬をほとんど飲まない私だが、体験にやってきたのだからとロイに従うことにした。

ロイの診断を受けて私専用のスケジュールが組まれる。本当は最低一週間は必要だそうだが、時間的・経済的余裕がないため三日というスピードコースをを用意してもらった。なにしろ、クラン・アンバサダー・ホテルのキュアセンターにたった二泊三日滞在するだけで760スイス・フランもするのである。それも、ヴァリス・アルプスの雄大で冴え冴えとした山並みを見渡せる南側の部屋ではなく、土手に面したシャワーだけのちいさな北側の部屋なのに。それまで比較的宿泊費が高いスイスでも一泊80フラン以上出費したことがない私にはとても辛い決心であったが、一生に一回と思って強行することにしたのだった。

第 一 日

ペディルーヴ・マニルーヴ 初日の午後は、基本的な水浴をいくつか体験する。ペディルーヴ・マニルーヴ(Pedi-luve/Mani-luve)と呼ばれる手・足のシャワー浴は、腰かけて肘から手先、膝から足先をそれぞれ四つの浴槽に入れ、10度から38度まで温度が変化する湯水のいきおいのよいシャワーを浴びることである。血管が収縮したり拡張したりするのが感じられ、なかなか

心地よい。身体は生き物で外界からの刺激に敏感に反応するのだと実感できる。

手浴・足浴 夕方5時から7時のあいだには、手浴を15分行う。「マセラシオン (macération)」と呼ばれる濃い茶色のハーブ浸出液に肘から手先を浸ける。“Nanami”とラベルが貼られたケースに入った私専用のハーブ液は、使うたびに電子レンジで二分ほど温められて出てくる。マセラシオンに入っているハーブは、キヅタ、ハムギ、イラクサ、ローズマリーなどであり、リラックスさせ活力を高める作用があるという。

喉の蒸気浴 それから、同じ部屋にある吸入装置で、随時、ユーカリの入った蒸気を吸い込み、喉・気管を清浄にすることも忘れてはならない。

カタプラスム 一日の締めくくりは、カタプラスム (cataplasme) というキャベツの千切りと卵の白身を混ぜた湿布である。これを週4回 (月・水・木・金) の午後7時30分から9時の間に受け取り、少なくとも2時間以上、肝臓のあたりに湿布しておかなければならない。肝臓からの老廃物が浸出するのを助けるということである。臭いといやにひんやりした感じがなかなか馴染めないものである。だが、メッセージの従弟のジャック・デカン氏によると、マセラシオンをもちいた手足浴とならんでこのカタプラスムこそが、フランスの民間治療者モーリス・メッセージの植物治療の基本であり、数百年におよぶメッセージ家のハーブ治療の伝統を受け継いでいるということである。省略しては意味がないらしい。

夕食 食事は、アルプスの山々を見晴らすレストランで美しい皿にのせてコースで供される。木曜日のディナーは、庭の草でつくった「田園サラダ (la salade pastorale)」で始まり、メリッサやニガヨモギなどレモンの香りのする植物をあしらった色も鮮やかな西瓜のシャーベッ

トが続ぎ、メインはウイキョウを入れた真鱈のブランドード⁵⁾に赤いビート (甜菜) のつけあわせ。彩りも鮮やかで食欲をそそられるが、口に運ぶと味がしない。どうしても塩味が欲しければ岩塩を溶かしたハーブ液を少しふりかける。デザートはサフラン風味のすりおろしたリゾ。パンもバターも、もちろんワインも禁止。食後のコーヒーはなしで「幸せのティザーヌ (tisane de bonheur)」という名のハーブ・ティー。これで370カロリー。

最初の晩は、「私はただこのキュア・センターを訪問しているだけで療養者ではありません」とウェ이터たちを騙し、グラスワインとパン・バターを手に入れることができたが、次の日からは、「あなたの食事はあなた用に特別に計画されたものですから」と予定通りのものしか与えられなくなってしまった。これだけでは空腹だと最初は恨みに思っていたが、何回か食事をするうちに胃も軽くなりちょうど良い感じになる。食欲が押さえられる薬草を食べているかららしい。それにしても、一人一人の状態に合わせた食事のため、ほとんど味の無い料理を決められたテーブルで一人黙って食べるのは、私の食事イメージとはほど遠いものであった。

第二日

足浴 二日目のスケジュールは次のとおりである。朝は、7時30分から10時45分の間の足浴 (Bain de pieds) から始まる。朝は7時に、昨夜の約束通りルネの部屋へ行き、ティザーヌやマセラシオンの調整を見せてもらった。ティザーヌは、一日に三回調整されるが、午前用、午後用、夕方用と浸出するハーブが異なる。大量に用意された乾燥ハーブを大きな釜に入れて湯を注ぎすこし待って漉す。そのタイミングは勘だ

そうである。

朝食 朝食は、最初の日にホメオパシー・ドクターのロイに頼んでおいたものが部屋まで届けられる。キュア・センターを訪ねる人々は朝食をあまりよくばらないらしく、私がヨーグルトも果物もと頼むと、ロイはなかばあきれ顔でカルテに書き込んでいた。しかし、そのようにしてようやく運んでもらったヨーグルトももちろん無糖で盆の上を見回しても砂糖はなく、果物もあの例のりんごのすったものだけ。他にふすま入りの小さな角パンが2枚。そして、メッセージの朝食の第一の特徴とされる、小さな透明の蓋付き容器に入ったニンニクかけ分を刻んだもの。これを毎朝呑み込むのである。新鮮だからこそ薬効があるという。初めての朝食の時には鼻をつまんで半分ほどをのみ込んだが、これは苦行であった。最後に、アンブルに入った二種類の液体の薬を飲む。一つは、若さを保たせるもの、もう一つは、食欲を押さえる作用があるという。これも、口がすぼまるほど苦い。

レギュラー・ドクターの診察 9時からレギュラー・ドクターのシュレーダー氏の診察。尿検査も行って腎臓の機能を調べる。心電図をとり、上腕で体脂肪比を測る。私は、許容最大限の脂肪に満たされ、筋肉がほとんどない危険な状態にあると注意される。毎日歩いたり自転車に乗ったりするように勧められる。それから、私の最大の悩みであり、私に資料やコンピュータに向かうことを一日2時間程度しか許さない外斜視を診察し、メガネで矯正するだけではなく、筋肉訓練をするように言われる。

水中ジムナスティクス 10時から、プールでグループ体操である。屈強な指導員の指示に従い、浮き具のマットをつけて、自転車こぎやウエストをひねるかっこうでプールの中を浮き足歩きするのである。45分間はとても苦しく長く

感じられる。明日はさぼろうと決めた。

薬用植物浴 10時45分からは、薬用植物の浸出液を入れたバブルバスで身体を温め刺激する。プールで疲れた筋肉がほぐされていく。肌も柔らかくすべすべになった気がする。

レフレクシオトミー 11時から、マッサージというから、凝りと疲れをほぐしてくれるのかと期待したら、レフレクシオトミー(Réflexiotomie)の施術者のオリビエが、足の裏のつぼを押して身体の状態を診察するというものだった。まず足指の付け根や足の裏全体を眺めて心と身体のバランスを見極める。根拠は不明だが、「まあまあ」という。足の裏を強く押されるとあちらこちら痛いが、特に問題なのは、左目からきている痛みだという。いままで私は、両眼が同じくらい外に開いている外斜視と診断されてきたが、オリビエは、左目の方がひどいという。それから、両足裏の外側の痛みが肝臓の疲れ、内側の痛みが腎臓不全を示しているという。

オリビエによると、レフレクシオトミーは、「健康の窓(Fenêtre de Santé)」と「病気の窓」のうち、レギュラー・ドクターが後者を診るのに対して、「健康の窓」を覗き込むことだそう。健康の窓の中は三段階に分けられる。足裏を触ったり押したりしたとき、施術者も問題を感じ本人も痛みを覚えるのは、レギュラー・ドクターの診察を勧めるべき第三の段階、そしてそれより軽い二つの段階がある。レフレクシオトミーは、疲れすぎていないか、酷使していないかなどと自分の生活を振り返る手伝いをするらしい。いずれにしろ、大切なのは、心と身体全体のバランスである。

昨日から様々のハーブ液に浸けられて、でもだまされないぞとなんとなく頑なになっていた私は、ふと、このレフレクシオトミーで、ずい

ぶん出費したけれど、体験してみてよかったと思った。実は私は、いちいちあげないが、身体に悪そうな不健康とされることも大好きである。それは、楽しく落ちて着く。運動もおもしろくない限りやりたくない。でも、授かりものを邪険にしてきたんだなあ、としみじみ思われた。生活がかわるかどうか、でも少しは気分が違う気がする。オリビエとの出会いはそうしたものだ。同時に、これこそが、私が鬱陶しく思いたくば怖れていたことなのだと思います。自分の身体を考えることを通して、自分の日常生活を振り返り、身体と響き合うとされている心にまで思いを馳せてしまうこと。それは、自分と向き合うことにほかならず、時には、大なり小なり変化や変身を促すかもしれない。

泥浴・砂浴 30分という予定時間を大幅に越えて1時間ほどレフレクシオトミーの説明を聞き、少し心を入れ替えなければとは思いつつも足の裏が痛くなっていた私は、次に案内された部屋でうつぶせになって、海泥を温めたパックを背中中に貼られると、そのじんわりした温かさに痛みも忘れた。三十分ほどの湿布を繰り返すことによって、神経がほぐれ、悪いものが徐々に体外に排出されるという。残念なことにはここは海ではないが、南国にいるような暖かさのなかで、ほっとする。砂浴も同様の効果があるそうだ。

エステ 緊張が解けて身体中の毛穴がほどよく開いたところで、一時間かけて顔の手入れを受ける。エステなどというものは経験がないし楽しみにしていたら、とにかく痛い。まず、スクラブをつけたスポンジでぎりぎり顔をかすめるのである。心得がないのに自分でマッサージしたりするとかえって皮膚が黒ずむと聞くので、いつもあまりこすらないようにしているのに、赤向けになって顔中スキー焼けのようになるのではと涙が出そうになる。けれども、鎮静作用

がある植物のローションをつけてもらい顔の皮膚はまったく赤くなることなく、ぴんと張り、しばらくは鼻の頭もてかてかしたりする心配がなくなった。でもやはり今回限りにしたい。

ペディループ・マニループ エステのあとは、昨日と同じく、手足を四つの水槽につけるシャワー浴を15分ほど行い血管をパクパクさせる。

手浴 夕方5時から7時の間には、またマセラシオンで今度は手浴をしなければならない。温められた自分専用のハーブ抽出液マセラシオンの茶色の液に肘から下をすっぽり浸す。

カタプラスム 食事のあとはキャベツと卵白の肝臓用湿布カタプラスム。これこそがメッセージの植物療法の基本となるものだが、ひんやりしてちょっと重苦しく、勧められたようにこれを一晩中巻いたまま眠るのは気が進まない。最低2時間というからそれだけは湿布していた。

なにがそれほど効いたのだろうか。それまで滞在していたチューリッヒでは、眠っていても都市の響きが身体を振動させるようだったのに、その夜は、やはり筋肉がリラックスしたのか、頭から邪念が叩き出されたのか、経験をしたことのないほど身体が軽く、殺されそうになっても起きないだろうほどに熟睡したのである。

第三日

朝は自分の部屋で採る朝食にはじまり、7時30分から10時45分までのあいだに20分ほどの足浴。今日は、三日間の最後の日でありたった半日のスケジュールしかないのだが、この予定潰けがなんとも窮屈で、またピンクのガウンを着ていると「健康に気配りする人」とラベルを貼られたようで、落ち着かない。それに、午前中だけでも、このぬけるような空のもと、クラン・

モンタナを散歩でもしなければ、午後にはまた電車にのってローザノス経由でチューリッヒまで5,6時間ほどの旅をしなければならない。すぐにまた、アッペンツェルで予定がはいっているからである。だが、昨日よく眠れたことで、あと半日、プログラムの最後までがんばってみようという気になった。

ドクター・シュレーダーの診察 今日レギュラー・ドクターのシュレーダーの診察ではじまる。体重と血圧を測る。昨日の検査結果から肺活量などが小さすぎることを注意される。

ペディループ・マニルーフ 手先・足先の温水・冷水交互のシャワー

プールでのグループ・ジムナスティクス 昨日は絶対さぼろうと決めていた浮き具をつけて行う水の中での体操も、身体が軽くなったらまたやってみたいと予定の45分間水掻きをする。

薬草浴 思いの外激しい動きであるプールでの体操で疲れた筋肉が、ほかほかとほぐれてゆく。

リンパ排液法・リンパ腺指圧 最後に、これまた不思議なリンパ液のドレネイジというセラピー。横になって、黒い長靴のようなものを太ももまですっぽりと履く。足に巻き付けられた長靴状のものは二層になっていてそこに薬液が送り込まれる。圧迫された足からは、浸透圧などもありリンパ液が染み出て身体が浄化されるという。これは苦しくもなく心地よい。この療法をセットすると施術者は部屋を出ていってしまい私は一人で残される。これが終わると、今度は首からリンパ腺を指圧してゆく。

こうしてようやく三日間の日程を終えた。以上のスケジュールの他に、サウナ、ウォーターベッドでの昼寝、戸外での日光浴などは好きなだけ行ってよいことになっているが、私は、その時間をとることができなかった。

晴れ晴れした気持ちで、アルプスの峰々を望む食堂で最後のヴェジタリアンの昼食を摂る。

おわりに

翌週、私は、アッペンツェル地方の調査のためいったん戻ったザンクト・ガレンから、今度はモーリス・メッセゲの従弟ジャック・デカン氏が運営しているオヴロナッツの植物温泉センター(Thermalp)へ向かうため、シオンから一時間ほど再びバスに揺られて山を登っていった。

建物の内側がピンク色で統一されたセンターで、ジャック・デカン氏も白衣などは着ておらず、治療者というよりは友人のように滞在者と気軽に言葉を交わしていた。滞在者たちは活動的ないでたちをしたリゾート客という感じで、もはやメッセゲ家伝来のあのキャベツの湿布カタプラズムなどを貼り付けて歩いていたりはしない。プールも明るいモダンなもので、人々は思い思いに泳ぎ回り、浮き具を付けて苦しそうに水中ウォーキングをしている人はみかけない。美容に力を入れているということだが、化粧品には、古代ヒポクラテスの頃からの智慧にもとづいて身体の四体液のバランスを取り戻すため調整され、肌をきれいにすると説明が付されている。ジャック・デカン氏へのインタビューを終えて立ち寄ったセンターのレストランでは、ワインも飲めたし、ブルーチーズ入りのこってりしたドレッシングがたっぷりかかったサラダも食べることができた。ヘルシーな節制風のメニューもあるが、ここではごく一部である。デカン氏もいうように、客のほとんどがスイス人であるというこのセンターは、病気の療養というより、おもにジュネーブなど都会で生活している人々が、清浄な空気と明るい太陽、そして

清澄な水で心身ともにリフレッシュできる場所として機能しているようであった。

モーリス・メッセゲの父親カミーユは、植物治療が特に効を奏する腎臓などの疾患や身体の痛みには、足浴や腰浴を併用していた。現在、クラン・モンタナのキュア・センターでは、メッセゲの基本的な足浴・手浴に加えて、泥浴・砂浴まで含む様々な水浴が実践されている。プールでの運動も欠かせないものである。そして、オヴロナッツでは、楽しみとしての水浴も推奨されている。もともと、植物治療には水がないまぜになった系譜がみられるが、メッセゲの植物治療の現在は、より積極的に水治療と合体している状態といえよう。

植物に関してメッセゲの父親は、自分の足で辿り着くことができる土地の薬草を採って使っていた。メッセゲの生まれ故郷ガヴァレ村はそうした草々が育つところであった。しかし、今回、トゥルーズから西へ二両編成のディーゼル車で二時間あまりのオーシュから、さらにバスで20分ほどのフルランスにあるメッセゲの本拠地に赴き、現在指揮を執っているベルナール・ラフィット氏に聞いたところ、植物は、一つ一つそれらが最も適した地で栽培しているということであった。あるものは、太陽光が素晴らしいモロッコで、そしてローズマリーはやや寒冷なブルターニュ、ラヴェンダーは南仏でという具合にである。それは、モーリスの父カミーユの植物採集とはずいぶん違った植物とのつきあい方である。田舎の小さな町であったフルランスは、メッセゲの本拠地となつてしばらくはハーブや花の市場としてわき返り賑わいを見せていたが、植物が遙か遠くから運ばれるようになった現在は、メッセゲの植物薬製造工場が静かに稼働し町の人々はそこへサラリーマンとして働きに行っている。

今回体験した様々なセラピーにおいて感じたことの一つは、施術者が、装置や条件を設定するのに必要な時間のみしか療養者と共に過ごさないことである。ペディルーヴ・マニルーヴと呼ばれる手・足のシャワー浴の時には、施術者は装置の使用方法を説明し終えると、小部屋と廊下を仕切るカーテンの外に出てゆく。薬用植物浴でもやはり、私をバスに入れハーブ液を注ぎ終わると施術者は出ていく。泥浴でもエステでも、パックを施すと施術者は外へ行く。彼らは、私が薬効などについてあまり多くの質問をし続けると困惑気味にすら見える。リンパ排水法・リンパ腺指圧でも、指圧以外の時間に私が装置に身をゆだねている時は、施術者は部屋から出ていく。そして彼らは、終わった頃を見計らって姿を現すのである。

プールでの水中ジムナスティクスと足の裏に触って身体を診るレフレクシオトミーの時のみ、私はすべての時間を施術者と一緒に過ごしたのである。45分間あるいは1時間という時を、声をかけられつつ水掻きしたり、足の裏を押されながら少しずつ自分のことを話したりするのは、あたたかくほっとすることでもあった。しかし他方で、出会ったばかりのまだよく知らない施術者が部屋から出ていってしまうと、ほんとうにのんびりして、うつらうつらしたりいろいろ思いめぐらせたりすることができたことも事実である。

モーリスの父カミーユは、隣人の家で何日も過ごしたり、自分の家に病人を泊めて一晩中そばに付き添っていたというし、モーリス・メッセゲ自身、弱り切った遠くの患者の家に向かい、回復の兆しが見えるまでそこで一緒に暮らした。そうした機会に、治療者と患者は互いに生涯にわたる友人を見いだすこともあったという。だが、クラン・モンタナのキュアセンター

のごく短い滞在時間では、一緒にいる時間を増やしたり無理に話したりしないことが、双方を心地よくさせるようであった。なにかもが忙しい現代生活から一瞬抜け出して過ごす療養所で、もっともゆったりすることの条件として、一人でいる時間を保証されることも重要であるのかもしれない。

植物治療と水治療の合体や、植物薬と人々のつきあい方、施術者と療養者の関係などに見られるメッセゲの世界の変容を垣間見ることになった秋の調査であった。それらの変化は、必ずしも嘆くべきものではなく、現代生活に適合したより効果をあげる方法として、施術者・療養者双方に迎え入れられていることが観察された。

今後の課題として、モーリス・メッセゲの著作の本格的分析があげられる。この試みをとおして、19世紀アメリカのトムソニアニズムや昨夏着手したアメリカ南部の植物治療の伝統と現在への関心をも含む、欧米植物治療の系譜の解明へ向かいたい。

註

- 1) ハシバミの棒のたわみ、または振子で地下の水脈を発見できると言われる。カミーユに、家の周囲6～10キロまでの住民が地下水の在処を教えて欲しいと頼みに来ていた。カミーユは、「ハシバミの魔法の棒」と植物の植生によって水脈占いをしていた(Mességué 1970:14)。水脈占い人に関しては、Goubert 1986が参考となる。
- 2) 筆者は、スイスにおけるホメオパシーの治療の実際に関し、ホメオパシー医、ホメオパシーの薬剤師などにインタビュー調査を行い、またホメオパシーの受容に関し街の薬局や書店などの調査を続けてきた(バーゼル[1994年8月～9月]、チューリッヒ、ラッパーズヴィル、アインジーデルン、アッペンツェル、ザンクト・ガレン、ジュネーヴ[1997年8月～

9月])。調査結果に関しては別稿を期するが、ここでは少なくとも、バーゼル、ジュネーヴなどにはホメオパシー医養成の専門医学校が数校設けられており、書店の医学書の棚には常に相当数のホメオパシーの書籍が並べられていること、調査を行った町では、100メートルごとにホメオパシーの薬局があるといっても過言ではないほどに、ホメオパシーを表す緑の上皿天秤の看板を掲げた薬局が立ち並んでいることを記しておきたい。診療規制のゆるやかなアッペンツェルでホメオパシーを手がける薬剤師アルフレッド・ヴィルト氏は、父親の代から伝わるこの薬局独自の処方によってアッペンツェルの高山植物から製した薬に手作りのラベルを貼って販売している。この健胃薬は町の人々にはなくてはならないものである。

なお、ドイツのホメオパシーの歴史的変容と現況に関しては(服部 1997)を、イギリスおよびアメリカにおけるホメオパシーの受容に関しては(Rankin 1988; Kaufman 1988)を参照。

- 3) ザンクト・ガレン州トイフェンのフォーゲルの治療所は、フォーゲル亡き後、若いレモ・フェッターによって運営されている。フェッターは、バーゼルのホメオパシー医学校を卒業しており、トイフェンで薬草の栽培、ホメオパシーの講義、ホメオパシー製剤の販売等を行っている。また、フォーゲルの基幹植物ヤグルマギクの栽培とホメオパシー薬の調整は、ログヴィルに新しく設けられた「(株)バイオフォース(Bioforce)」で行われている。バイオフォースでは、ドイツのホメオパシーの伝統を基礎として、近隣のアッペンツェル地方の民間強壮剤や食物をフォーゲルのホメオパシーと結びつけ、最近ではアメリカにも進出している。筆者が調査に赴いたときには、アメリカでバイオフォースの製品を販売している健康食品会社社員たちが研修に訪れていた。
- 4) アッペンツェル地方の民俗医療に関する調査は今後も継続予定であるが、基本文献として、現代の病院出産に異議を唱えて自宅で助産を続ける産婆グルー

ベンマン（筆者は1997年9月にグルーベンマンの自宅助産所の見学および助産と医療に関する信念・助産の変容に関しインタビューを行った）の著作（Grubenmann 1993;1995）およびアッペンツェル地方の医療に関する文献（Inauen, et al. 1995）があげられる。

- 5) ニース名物の塩鱈料理。鱈のすり身にんにく、オリーブ油などを加えてベシャメル・ソースで煮る。

参考文献

- Cayleff, Suzan E.
1987 *Wash and Be Healed : The Water-Cure Movement and Woman's Health*, Philadelphia : Temple University Press
- Le Centre de Cures Maurice Mességué
n.d. *Les Plantes du Bonheur : Toutes les Recettes*
- Fuller, Robert
1989 *Alternative Medicine and American Religious Life*, Oxford University Press（ロバート・フラー、池上良正・池上富美子訳『オルタナティブ・メディシン アメリカの非正統医療と宗教』新宿書房、1992年）
- Goubert, Jean-Pierre
1986 *La Conquet de L'eau*, Editions Robert Laffont, S.A., Paris（ジャン＝ピエール・グベール、吉田弘夫・吉田道子訳『水の征服』パピルス、1991年）
- Grubenmann, Ottilia
1993[1979] *200 Praxisfälle*, Band I / II, Weissbad : Alpstein-Verlag
1995 *Schwangerschaft, Geburt und Stillzeit*, Weissbad : Alpstein-Verlag
- 服部伸
1997 『ドイツの「素人医師」団 人に優しい西洋民間療法』講談社
- Inauen, Roland, et al.
1995 *Kräuter unt Kräfte : Heilen im Appenzellerland*, Herisau : Verlag Schläpfer & Co. AG
- Karl-Heinz Gebhardt(Hrsg.)
1996[1950] *Stauffers homöopathisches Taschenbuch*, Heidelberg : Karl F. Haug Verlag
- Kaufuman, Martin
1988 "Homeopathy in America : The Rise and Fall and Persistence of a Medical Heresy", in Gevits, N. ed., *Other Healers*, The Johns Hopkins University Press
- Mességué, Maurice
1970 *Des Hommes et des Plantes*, Editions Robert Laffont, Paris（モーリス・メッセゲ、高山林太郎訳『神は私に薬草と奇跡をさずけた』婦人生活社、1983年）
- 1972 *C'est La Nature qui a Raison*, Editions Robert Laffont, Paris
- 1975 *Mon Herbiere de Santé*, Editions Robert Laffont, Paris（モーリス・メッセゲ、高山林太郎訳『メッセゲ氏の薬草療法』自然の友社、1996年）
- Numbers, Ronald L. ed.
1987 *Medicine in the New World : New Spain, New France and New England*, The University of Tennessee Press
- Odermatt, Carlo & Spani, Armin
1996 *Homöopathie : Das richtige Arzneimittel-rasch gewählt*, Gremag
- Rankin, Glynis
1988 "Professional Organisation and the Development of Medical Knowledge : Two Interpretations of Homoeopathy", in Cooter, R. ed., *Studies in the History of Alternative Medicine*, Macmillan Press

鈴木七美

1994 「19世紀アメリカにおける『自然出産』運動 — 植物治療運動と水治療運動における出産・『自然』・人間関係」日本民族学会『民族学研究』58巻4号, 356-381頁

1997 『出産の歴史人類学 産婆世界の解体から自然出産運動へ』新曜社

Vogel, H. C. A.

1952 *The Nature Doctor : A Manual of Traditional and Complementary Medicine*,
Edinburgh : Mainstream Publishing, Co.

1996 *Conseiller pour la santé*, Teufen : Editions A. Vogel

謝 辞

本調査研究, そして註1, 2, 3にあげたスイスのホメオパシーおよび民俗医療に関する調査研究は, 京都文教大学人間学部文化人類学科の研究助成(海外学術調査奨励金)によって遂行することが可能となった。またスイス・アッペンツェル地方の民俗医療に関しては, 京都文教大学臨床心理センターのブルーノ・リーネル氏に貴重な情報を提供していただいた。謹んで感謝の意を表したい。

The Phytotherapy of Maurice Mességué :

Development of Botanical Folk-Medicine in Gascogne

Nanami Suzuki

Key Words : Maurice Mességué, botanical folk-medicine, water-cure, homeopathy

Maurice Mességué was born in a small village of Gavaré in Gascogne in 1921, and learned botanical healing from his father, Camille. His art of botanical healing has been a part of the Mességué family for some five hundred years, and has originated from botanical folk-medicine in South-western France. Mességué's knowledge of herbs was transferred from "The Bible of Herbs", an old illustrated book that had been handed from generation to generation. Maurice's father, Camille, also had learned his way of healing by this "Bible", and was a man who was called a magician, or healer. Camille had no job other than smelling the scent of herbs in bloom, looking up at the moon to ascertain the best time to collect herbs, observing animals to determine how they used herbs in time of physical trouble, and hearing the sound of water running from the earth ; thus giving life to both herbs and men. Maurice was very proud of his father's way of living, and as a child he took walks with his father, looking for herbs in the field.

In this paper, I have attempted to introduce the modern aspect of his art of healing. At present, there are three cure-centers in Switzerland and Italy where Mességué's way of healing is practiced. I visited two cure-centers in Switzerland in September, 1997 ; and I observed the healing process modernized there, the details of which are reported and analyzed in this paper.

Through my fieldwork, I have discovered that the ways in which the herbs are grown and harvested have changed through the ages. This of course is due to the scientific, technological, and industrial advances made in European society over the past 500 years. Herbs that were at one time seasonal can now be grown and harvested throughout the year, utilizing favorable climates and terrains for the various herbs used. Many new herbs have also been introduced, mostly from incorporating ideas of homeopathy which originated from Germany and have become quite popular in Switzerland and France.

Not only has there been a change in the making of the herbal medicine, but the actual care of patients in need of treatment has changed over time. In the days of Maurice and his father, the curer would stay with the afflicted person until the curing process was complete. Now, patients are left alone in the herbal or sand baths with the curer visiting from time to time to ascertain the condition of the patients.

The relationship of the patients and practitioners, as well as the cultivation and use of herbs have changed over the years. Yet it must be remembered that both today's patients and practitioners are quite satisfied with these changes and welcome the new developments in the long-lasting traditional medicinal art.